

【巻頭言】 副学長・附属学校教育局長 呑海沙織

「安心して学び合える学校づくりの実現に向けて —SEL-8Sの導入—」

- 2 附属学校教員研修会「生成AIと学校教育」を開催 ———梶山正明
- 3 わたしたちにも出来た! 筑波っ子天気予報! ———辻 健
- 3 新学期の準備「治療室のカーテン交換」 ———沖中美世乃
- 4 韓国研修での英語プレゼン指導 ———深宮美宇
- 4 災害体験と浅草散策の社会見学 ———小清水貴一
- 4 第12回 アメリカ短期留学プログラムのご報告 ———高杉達也
- 5 附属学校三校間生徒会交流会 ———熊倉悠貴
- 5 研究開発学校・研究発表会と情報発信 ———佐藤義竹
- 6 社会と関わって生きる「学校設定教科の取組」 ———高橋佳菜子
- 6 卒業生を送る会 ———遠山智子
- 7 臺北市立啓聰學校との交流「台湾研修旅行」 ———玉生美智子
- 7 キャリア・カフェ Milestone ～宇宙のお仕事編～ ———畑 綾乃・田崎俊介
- 8 第21回「科学の芽」賞 募集要項



筑波大学
University of Tsukuba



附属坂戸高等学校「育てる経験から広がる学び」

安心して学び合える学校づくりの実現に向けて

— SEL-8Sの導入 —

副学長・附属学校教育局教育長 呑海沙織



DONKAI
SAORI

本学附属学校では、子どもたち一人ひとりが自分らしく安心して学び、他者とよりよい関係を築きながら成長することを目指し、社会性と情動の学習（Social Emotional Learning: SEL）プログラムを導入します。本年度は附属小学校および附属中学校で実施し、その成果を検証しながら、将来的には全附属11校へ段階的に展開していく予定です。

近年、社会環境の変化に伴い、子どもたちが自然な関わりの中で社会性や感情の力を育む機会が減少しています。本学附属学校では、子どもたちの内面の力を育てることによって、いじめやトラブルを未然に防ぐ「プロアクティブな生徒指導」を推進しており、SELはその中核を担う取組です。

SELは、自己理解や感情の調整、他者理解、対人関係、責任ある意思決定といった力を育む教育実践の総称であり、その効果は国内外の研究でも示されています。本学附属学校教育局は、SELを附属学校における教育の重要な基盤として位置付け、安心して学び合える学校づくりを通して、子どもたちが未来を主体的に切り拓く力を育む教育の実現を目指してまいります。

附属学校教員研修会 —生成AIと学校教育—を開催

元附属学校教育局 教授
梶山正明



金森先生による講演

令和7年度附属学校教員研修会「生成AIと学校教育—授業革新・校務効率化に向けて—」が、3月7日に東京キャンパス（+オンライン）にて開催されました。

第1部は、基調講演として、筑波大学システム情報系教授の金森由博先生に「筑波大学情報系における生成AIによる教育・研究の変化と課題」と題してお話いただきました。生成AIの基礎知識と最新動向を簡潔にご紹介いただいたのち、生成AIが筑波大学情報系において教育と研究にもたらした変化、さらに、現時点で見えてきた課題についてもお話いただきました。

第2部では、附属学校で生成AIの現場での活用を進めている先生からの実践報告を行い、その後の質疑応答も含め生成AI活用についての理解を深めました。

- ①附属坂戸高等学校主幹教諭 塚原康介 先生
「高等学校における生成AIの活用事例
—附属坂戸高等学校の進路指導の場合—」
- ②附属駒場中・高等学校教諭 有木大輔 先生
附属駒場中・高等学校主幹教諭 川人 武 先生
「AIがつなぐ漢文と美術の横断型実践」
- ③附属中学校主幹教諭 多田義男 先生
「中学校技術科における探究学習の深化
—対話の可視化と生成AIの多角的な活用—」



- ④附属視覚特別支援学校長 森田浩司 先生
「AIは使えるのか？ 学校現場における働き方改革の一手—保護者記述アンケート分析の実演から—」

駒場高の生徒がAIに生成させた漢詩の画像

// わたしたちにも出来た! 筑波っ子天気予報!

附属小学校 理科部 教諭 辻 健



5年生に天気予報を伝える6年生の姿

10月の最終日、ついに5年生の子どもたちが、運動会の日々の天気を予報し昇降口で発表しました。5年生が行った天気予報を見て満足気な6年生。6年生は6月に5年生に天気予報の仕方をそれぞれのペアに伝えコーチングを続けてきました。その成果が実った瞬間ともいえます。毎日のようにクラウドの同じチャンネルに天気予報をアップロードし続けた4か月間。「5年生の天気予報、理由もしっかりしていていいね」「5年生の天気予報しっかり当たったよ」と私にも6年生は5年生のがんばりを伝えてくれました。ちょうど1年前、自分たちも不安になりながらも思い切って天気を予想し、昇降口に特別に設置した掲示板に天気予報を掲示した経験があってこそこの言葉であると感じました。

6年生もまた、天気の予想の仕方を知っている、分かっているという状態から、5年生に対して説明できる、コーチングできるという状態に自分たちを引き上げました。自分だけでなく相手ができるようにするという、より高次の学びを行ったのです。自分たちが行ってきたことが、形となって現れたことを5年生も6年生も喜びました。もちろん、私も子どもたちの関わりを通じた成長を喜ばしく感じました。

まもなく、進級した新5年生が天気の学習を始める時期。次は教える側として、新6年生が大きく成長する姿に期待をしています。



僕たちもやり遂げた運動会の天気予報

// 新学期の準備 —治療室のカーテン交換—

理療科教員養成施設 助教 沖中美世乃

理療科教員養成施設では、視覚特別支援学校で鍼灸・あん摩マッサージ指圧を指導する理療科教員を養成しています。本施設理療臨床部の附属のはりきゅう治療室(ベッド20台)では、理療科教員を目指す施設学生と、鍼灸師養成施設の卒後研修を行う理療研修生が治療に携わっています。

学生は全員、国家資格を有し、視覚障害のある学生も多く在籍しています。医療職であると同時に教育職として、専門性を社会で発揮する人材の育成を目指しています。

新学期の準備として、学生と理療研修生が協力して、各ベッド周囲の仕切りカーテンの付け替えを行いました。カーテンレールは手の届きにくい高さにあり、安定した椅子を使用して見上げる姿勢で作業します。取り外した大判のカーテンは、二人以上で端と端を持ち、形を整えながらたたみます。カーテンは重量があるため、カーテンを取り付けるには、下から支える役割があると取り付け作業の負担が軽減されます。視力や身長などの特性を踏まえて役割を分担し、「カーテンフックを確認するね」「反対側を支えて」と声を掛け合いながら進めました。

当初は手順を確認しながらの作業でしたが、次第に連携が整い、作業も円滑になりました。冬のサーモンピンクから夏のミントグリーンへとカーテンが変わり、治療室の雰囲気も一新されました。環境を整え、新学期の実習が始まります!



新学期の準備—治療室のカーテン交換—

韓国研修での英語プレゼン指導

附属駒場中・高等学校 英語科・研究部(国際交流係) 教諭

深宮美宇

3月の韓国研修では、釜山国際高校(BIHS)およびKorea Science Academy of KAIST(KSA)と交流しています。

1月に受け入れた際のBIHS生のパフォーマンスに触発され、筑駒でも訪韓に向けて英語プレゼンの準備を行いました。

最初は協働作業が機能せず、一貫性がなく表面的だったプレゼンが、検討会を重ねるごとに独自性と深みを増し、メッセージのある発表へと進化しました。

それでも、生徒たちの感想には「(強みを活かした相手校と比較して)自分たちは、英語、内容、スライド、パフォーマンス、あらゆる面で中途半端だった」とあり、予期した以上の気づきがあったようです。

適切な機会を与えれば、想定を超える学びを得るのが筑駒生。そこで、新たな試みとして、同時期に韓国研修を実施している都立日比谷高校と、合同研修報告会を実施予定です。交流を通して、新たな境地へと達してくれることと期待しています。



BIHSでの発表(日本の教育・家庭におけるジェンダー状況)



KSAでの発表(筑駒紹介と伝統文化について)

災害体験と浅草散策の社会見学

附属視覚特別支援学校 教諭 小清水貴一

令和8年3月に、中学部2年生が社会見学を行いました。見学先については、「クラス全体で訪れる場所としてふさわしいか」「触れたり体験したりできる内容が充実しているか」といった観点から、生徒自身が候補地を探し、話し合って決定しています。

今年度は、午前中に東京消防庁本所防災館で災害体験学習を行いました。昼食には、両国駅でちゃんこ鍋を味わい、午後は浅草仲見世通りでの食べ歩きを楽しみました。

本所防災館では、地震や水害、火災などの災害について、実際に体験を通して学ぶことができました。生徒からは「水害や暴風雨について聞いたことはあったけれど、体験してみると状況や対応方法を具体的に知れた」という感想が寄せられました。

昼食後は、両国・浅草周辺を散策し、下町の文化や雰囲気に触れる貴重な機会となりました。



強い揺れを体験し、安全姿勢「ダンゴムシのポーズ」を実践する様子



向かいから吹きつける暴風雨を実際に体験する生徒たち

第12回 アメリカ短期留学プログラムのご報告

附属中学校 英語科教諭

高杉達也

3月20日(金)から29日(日)の10日間、中学2年生・3年生の35名がアメリカ短期留学に参加いたしました。ペンシルバニア州のランカスター・メノナイト・スクールでの授業参加とホームステイを通じ、語学学習および異文化理解による視野の拡大を目的としています。

現地校では「アンバサダー」の生徒が終日サポートしてくれました。全校集会で本校の紹介や桐陰会歌を披露したほか、折り紙やけん玉、書道を体験してもらった文化交流を実施し、現地の生徒と親睦を深めました。

初めは緊張していたホームステイも、週末の外出や日常生活を共にすることで、異文化や宗教への理解を深める貴重な場となりました。最終日には別れを惜しんで涙する生徒もあり、国境を越えた深い絆が築かれました。語学だけでなく、視野を大きく広げることができた実りある10日間となりました。



独立記念館の前で



書道を教えている様子



附属学校三校間 生徒会交流会

附属坂戸高等学校 主幹教諭 熊倉悠貴



附属坂戸高等学校での生徒会交流 (令和8年3月)

令和8年3月25日(水)に附属高校・附属駒場高校・附属坂戸高校の生徒会メンバーが一堂に会し、今年度第3回目となる「附属学校三校間生徒会交流会」が本校にて開催されました。「附属学校をより良くしていくために生徒会として何ができるか」について話し合い、各校共通の切実な課題として、空調設備をはじめとする施設の整備や、それに伴う学校予算のあり方について活発な意見が交わされました。

生徒会はこれらの課題に対して単に要望を並べるのではなく、主体的に解決へ向けて動きたいと考えています。生徒のリアルな生活実態や声をどのように集約し、附属学校教育局や関係機関へ「建設的な提案」として届けていくべきか、三校が協働することで、より説得力のあるアプローチができるのではないかと議論を深めました。

異なる背景を持つ三校の代表者が集うことで、単独の学校では思いつかないような多角的な視点や、今後の活動の指針となる確かなヒントを得ることができました。今後の展望として「他の国立大学附属学校との連携」についても議論が及びました。全国の附属学校とネットワークを広げることで、共通の課題解決に向けたより大きな力にしていきたいと考えています。今後はこの交流会で得た成果を各校に持ち帰り、大学側との対話も視野に入れながら、生徒全員がより快適で充実した学校生活を送れるよう歩みを進めてまいります。



附属駒場高等学校での生徒会交流 (令和7年12月)



研究開発学校・研究 発表会と情報発信

附属大塚特別支援学校 主幹教諭・研究主任 佐藤義竹



研究発表会・高等部研究授業「理科」

本校では、令和4年度～令和7年度に文部科学省の指定を受け「知的障害特別支援学校における生活科・理科・社会科のカリキュラムモデルの創造—横断的で連続性のある学びを目指して—」と題した研究開発に取り組みました。その一環として年1回「研究発表会」を開催しており、最終年度は令和8年2月13日(金)に実施しました。

研究発表会には対面やオンライン参加、またアーカイブ配信を合わせて331名の教育関係者に申込みいただき、授業公開や協議を通して成果を発信しました。

〈参加者からの声(一部)〉

・様々な発達段階や実態の児童同士が共に学び、関わり合う、とても素敵なお互いの場面を目にすることができて感銘を受けました。

・中学部では単元のまとめで「あつあつラーメン」を扱う授業を予定していると分かり、とても安心した自分がありました。指導する項目を網羅することに頭がいっぱいになりがちですが、しっかりと自立と社会参加に絡めた単元の構成をしていかねばと改めて感じました。

・生徒たちが興味関心を持って主体的に学びに向かう姿(高等部:前のめりになって実験に取り組む姿など)が印象的でした。教師のきめ細やかな支援が大変参考になりました。

令和8年度は名目指定を受け、研究成果の整理等に取り組んでいます。そして、月刊誌「実践みんなの特別支援教育」(株式会社Gakken)に特集記事(2026年4月号)及び連載記事(2026年5月号～2027年4月号)による情報発信を進めています。



雑誌「実践みんなの特別支援教育」を介した発信

社会と関わって生きる —学校設定教科の取組

附属桐が丘特別支援学校 教諭 高橋佳菜子

高等部では、肢体不自由者の社会的自立・職業的自立に向けて必要となる「自己理解」「他者理解」「社会貢献」に重点を置いた「キャリア・プランニング(各学年の必修教科)」「キャリア・プラクティス(高等部2・3年生の選択教科)」を昨年度新設しました。「キャリア・プランニング」では自分なりの生き方を探り、見出し、卒業後の生活を設計していく力、「キャリア・プラクティス」では、他者と協働して課題解決する力をつけることをねらいとしています。

「キャリア・プランニング」では、卒業後の様々な選択肢を知り、自分らしい生活を構築していくために、外部の講師から講話をいただくことを取り入れています。昨年度はお金の使い方や、在宅勤務などの様々な働き方や職場でのコミュニケーションについて企業の方からお話をさせていただきました。生徒にとっては、自分の現状を把握したり、将来の希望を整理したりするよい機会となりました。

「キャリア・プラクティス」では、提示されたテーマ「桐が丘を元気に」をもとに、オリジナルグッズの販売に向けて、部署に分かれて活動をしました。生徒は年間の学習を通して、「異なる意見がある中で、皆で議論することが楽しかった。」「次の学年では、自分の意見を明確にもつことからはじめたい。」等、他者と共に新しいことを生み出すよさや自分の課題に迫るような発言が聞かれました。

今後も、生徒がこれから生きる社会を自分ごととしてとらえ、自分らしい生き方の実現に向けて前向きに取り組める学習を続けていきます。



職場でのコミュニケーションに関する講義(2年生、キャリア・プランニング)



話し合いの様子
(キャリア・プラクティス)

卒業生を送る会

附属久里浜特別支援学校 教諭

遠山智子



6年生の入退場

令和8年3月4日(水)、小学部において「卒業生を送る会」が行われました。本会では、各学年がそれぞれ

の役割を担い、心を一つにして会を盛り上げます。

3年生が丁寧に制作したカラフルな花のアーチをくぐり、卒業生が笑顔で入場すると、会場は温かな雰囲気になりました。5年生は、司会進行を務め、会を支える大切な役割を果たしました。また、5年生による卒業生紹介では、卒業生の好きな色や食べ物が紹介され、「僕と同じ!」「私も好き!」といった声も聞かれ、親しみを感じる場面が見られました。続いて、1・2年生が音頭を取った全校ダンスでは、友達と向き合って踊ったり、手をつないで大きな円を作ったりするなど、一体感あふれる時間となりました。6年生による発表では、和太鼓の力強い演奏が披露され、これまでの成長を感じさせる立派な姿が印象的でした。発表後には、4年生が、卒業生の好きな色で染めた巾着のプレゼントが贈られました。さらに、全校での合唱では、在校生の歌声に包まれながら、卒業生が喜びを表すように体を動かし、歌を楽しむ姿が見られました。最後は、在校生の拍手に見送られながら、卒業生がアーチをくぐって退場しました。

在校生は憧れの6年生に「ありがとう」の気持ちを精一杯伝えたり、6年生はその思いに応えるように堂々とした姿を見せたりするなど、心温まるひとときとなりました。



6年生による和太鼓発表



全校ダンス

臺北市立啓聰學校との交流 一台湾研修旅行一

附属聴覚特別支援学校 教諭

玉生美智子



臺北市立啓聰學校を訪問

令和7年12月、本校専攻科造形芸術科は台湾への海外研修旅行を実施し、臺北市立啓聰學校を訪問しました。

本校と同校は平成28年より交流を継続しており、対面に加え、オンラインでの作品交流を通して関係を深めてきました。コロナ禍においても、オンラインだけでなく直接生徒作品を送付するなど、文化や美術を軸とした相互理解を積み重ねました。

今回の訪問は久しぶりの対面交流となり、生徒は自作作品を掲載したカレンダーを制作し、お土産とするなど主体的に準備を行いました。現地では手作りプラカードでの歓迎を受け、温かな雰囲気の中で、交流が始まりました。小学部児童とのロボット操作体験や高等部生徒との作品紹介、写生や夜市体験など多様な活動を行うことができ、日本と台湾の文化の違いや共通点への理解を深める貴重な機会となりました。

コミュニケーションツールは、主にスマートフォンの翻訳機

能と手話の併用です。特に日本の手話と台湾の手話には歴史的背景に基づく共通点も多く、相互理解を進めるために非常に有効であると実感しました。

この交流は、多様なコミュニケーションの可能性と、ものづくりを主とした学びの可能性を実感する機会となりました。今後も対面とオンラインを組み合わせた交流を継続し、生徒の学びの深化につなげていきたいと考えています。



手作りプラカードで歓迎を受ける



台湾の文化の中で写生

キャリア・カフェ Milestone ~宇宙のお仕事編~

附属高等学校 教諭 畑 綾乃・田崎俊介

令和8年2月21日(土)に、東京大学大学院理学系研究科宇宙惑星科学機構 教授 橋省吾氏と、東京大学附属宇宙線研究所 准教授 牛場崇文氏を講師にお招きし、宇宙や宇宙に関わる仕事に興味がある生徒を対象としたキャリア・カフェを開催しました。橋氏は、はやぶさ2が小惑星リュウグウから試料を持ち帰った際の、総勢約400名で構成される試料の初期分析チームの統括を担った方で、はやぶさ2とリュウグウ、地球外物質などの「石の声を聴く」こと、研究の魅力についてお話いただきました。本校のOBでもある牛場氏は、大型低温重力波望遠鏡KAGRAの装置の開発の推進、コミッション作業を統括している方で、宇宙の謎を知るために非常に重要である重力波、世界最先端の研究施設KAGRAのプロジェクトについてお話いただきました。



橋氏の講演の様子

後半は、分野の異なる専門家同士の貴重な対談へと移り、その後の質疑応答では、研究職に必要な力、宇宙人、多元宇宙など、参加生徒から飛び出す様々な質問に、お二人が一つ一つに丁寧に答えてくださいました。参加者からも、「想定以上に様々なことに回答してくださり、非常に有意義な時間になったと思う。研究者は私たち学生から見ると、正直何をしているのか分かりにくかったが、今回の講演で実際の研究現場を見てみることで理解を深めることができた。」「専門分野が異なるお二人の考えの共通点や相違点を知ることができ、興味深かったです。」などの感想が寄せられ、贅沢かつ有意義な土曜の午後となりました。



橋氏と牛場氏の対談の様子



牛場氏の講演の様子

